# 【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】㊸

令和4年8月号

## 一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（16）」

広常はなぜ謀殺されなくてはならなかったのでしょうか。頼朝に対しての謀反心があったため、とされていますが、今回は有名なエピソードの一つ、『愚管抄』の記述を見ていきましょう。

建久元年（1190）、頼朝は上洛し後白河法皇（1127～92）と対面、その際に次のようなことを話したといいます（以下、執筆者による要約）。

「自分は朝廷のためを思い、私心なく、この身に代えてでも（朝廷のために働こう）と思っていますが、それは私が上総広常を討ち取ったことに明らかです。広常は東国屈指の有力者で、自分が挙兵して勝利できたのも広常を味方に加えたからこそでした。そのため広常は私にとって功績のある者でしたが、広常は『なぜ頼朝は朝廷のことばかりみっともないくらい気にするのか。我々が東国でやりたいようにやっているのを、誰が我々に指図できるでしょうか』というような謀反心の持っていた者でした。このような人物を従えていては頼朝まで神仏の加護を失うことになると思い、広常を殺したのです。」

ここには、頼朝自身が広常を殺した理由を語っています。また広常のおかげで挙兵に成功したとも語っており、広常の存在がいかに大きかったかを物語っています。

この記述については、当然のことながら後白河法皇や朝廷への配慮・リップサービスが過分にあることを念頭に置かなくてはなりません。この記述だけをもって広常が朝廷へ「謀反心」を抱いていたと考えるのは早計ですが、頼朝自身の考えを記した史料として重要なものといえるでしょう。

▲布施殿台城址
（いすみ市下布施、上総広常居館跡の伝承が残る場所の一つ）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416

令和4年9月号

## 一宮町の歴史特集「上総広常の実像を探る（17）」

広常はなぜ謀殺されたのか。今回のコラムでは諸説あるその理由を紹介していきます。

**【1】広常が「謀叛心」を抱いていたから**

**【2】広常が奥州藤原氏との関係が深かったから（頼朝の奥州出兵に反対したため）**

**【3】頼朝との路線対立（「中央政権」と「東国政権」）**

**【4】源範頼軍の京都派遣に反対したから（中央政権への介入に反対）**

このように様々な説が唱えられていますが、どれも「説」の域を出ず、広常の死は謎につつまれています。

そもそも、鎌倉幕府がどのような政権だったのか、という評価論の問題も関わってきます。頼朝の政権が朝廷から独立した「東国政権」なのか、それともあくまでも京都の朝廷、「中央政権」の一部としてとらえるのか、その評価の仕方、見方によって解釈が変わってきます。

ただ、広常の死はその後の有力者の粛清劇の始まりであったことはいえます。以下代表的な人物と死亡年を列記します。

一条忠頼（甲斐源氏）1184年
木曽義仲（源氏）1184年
源義経（頼朝弟）1189年
源範頼（頼朝弟）1193年
梶原景時（御家人）1199年
阿野全成（頼朝弟）1203年
比企能員（御家人）1203年

比企氏の乱後も有力者は次々と滅ぼされていきます。このように鎌倉政権内では、激しい権力闘争が行われ、政治的背景が広常を死に追いやった、ということは確かです。

次回はその時代背景を少し見ていきましょう。

▲瀧泉寺の大銀杏
（いすみ市大原。広常が植えたと伝わる。）

（学芸員　江澤一樹）

【問合せ】教育課　☎（42）1416